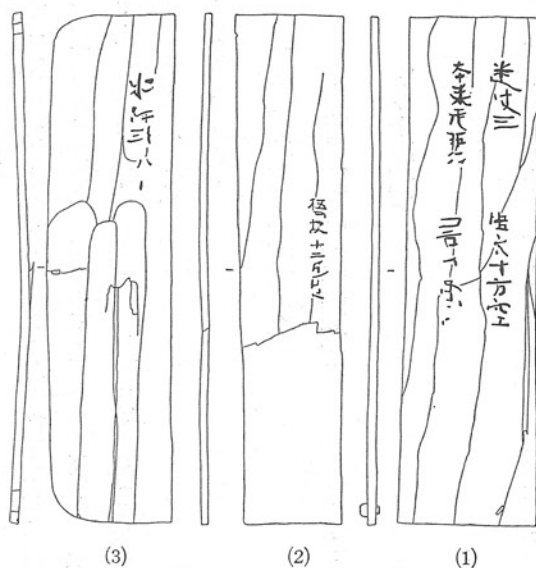


同『日置荘遺跡 その五』(一九八九年)

同『太井遺跡 その四ほか日置荘遺跡 その一―二』(一九九〇年)

同『日置荘遺跡 その二―六』未刊

(入江正則)



大阪・上町遺跡

うえまち

1 所在地 大阪府泉佐野市上町三丁目

2 調査期間 一九八九年(平1)九月～一九九〇年三月

3 発掘機関 財大阪府埋蔵文化財協会

4 調査担当者 重金 誠

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 一四世紀末～一五世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上町遺跡は、泉佐野市街のほぼ中心部、海岸線からは直線距離で約一〇〇〇mに位置する。付近一帯は、天福二年(二三四)に九条

家によって立荘された和泉国日根荘として知られるところである。

本遺跡は、一九八七年度に泉佐野市教育委員会が実施した、南海電鉄泉佐野駅駅上地区再開発事業に先立つ確認調査によって、中世の遺物や掘立柱の柱列等が



(岸和田)

検出されて存在が明らかになったもので、その後一九八八年度から再開発事業予定地内の調査を勅大阪府埋蔵文化財協会が実施している。調査対象面積約二二〇〇〇㎡のうち、八九年度と合わせて一四〇〇〇㎡余りの調査を終え、今年度も継続中である。

調査の結果、ほぼ全域で区画溝を伴った屋敷地群と墓域からなる集落跡を検出した。規模の判明する屋敷地について述べると、長辺四〇m、短辺三〇mの長方形に巡る幅一〜三mの溝によって区画されており、その中央に井戸を配する。区画された敷地は、溝によってさらに二区画に等分され、それぞれで掘立柱建物や土器を納めた土坑などが見つかっている。なお、屋敷地群の区画は、一部現在の水路や道路、田畑に残る地割に反映していることが判明している。これまでに検出した屋敷地群は、それぞれ互いに道路状遺構と区画溝によって接する形で、一定のまとまりをみせているのが特徴である。現段階では、これが個々の屋敷地が孤立分散して展開する従来の散村形態から、集村形態へ移行する過渡期における集落の姿ではないかと考えているが、今後の調査の進展を待ちたい。

遺物は、一四世紀末〜一五世紀代に属するものが大半で、主に区画溝内から出土している。土師器の坏・小皿や瓦質土器の甕・羽釜など日常雑器類を中心に、青磁・白磁・青花といった輸入品も多くみられて、本遺跡の性格を特徴づけている。また、識字層の存在の裏付けともなる硯も数点見つかった。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「<のいね一斗五升

・「> 二廿八加せ」^{〔郎カ〕}

(57) × 15 × 3 0.83

木簡は、調査地中央付近に位置する屋敷地内の、井戸の最下層から出土した。井戸は素掘りで、直径一・五mの楕円形を呈し、その深さは検出面から四m前後である。共伴遺物の出土量は多く、一五世紀に属する土師器や瓦質土器製品が大半を占め、木製品は曲物類や板片等がある。

木簡は上端に切込みがあり、下端をとがらせた付札の形態をとる。「のいね」については、『本朝食鑑』や『農業全書』に、畑稲あるいは畠稲の別称として「野稲」が使われる例が見られる。この用例を一五世紀代まで遡らせて考えても差し支えなければ「のいね」とは野稲を指し、水稲とは異なる品種である畠稲のことを意味するのであらう。

また『農業全書』では、畠稲は早稲（ひでりいね）であり「凡早稲を作る地は、水田にしては水乏しく、また畠にして湿気ありて、両様ともよろしからざる地に是れをうゆれば（下略）」と記されている。上町遺跡の位置する和泉地方は、一般に雨の少い瀬戸内式気候に属している。灌漑施設の十分な整備が、水稲栽培の可否を直接左右する条件であるとするならば、当時、本遺跡周辺のすべての耕地

で水稻栽培が可能なほど、灌漑施設が整備されてはいなかったことを示唆するものとして注目される。そして灌漑の行き届いていない場所では、畠稻が栽培されていたことを窺わせる史料であると考えたい。

「二廿八加せ□」^{〔郎カ〕}については、「二廿八」は二月二十八日、「加せ□」^{〔郎カ〕}は人名と考えられ、品物の貢納に関わる記載ととらえておきたい。

なお、羽子板状木製品が木簡と共伴して出土した。人物らしき絵と扇が描かれているが、参考までに実測図を掲げておく。

木簡の釈読・内容については、四天王寺国際仏教大学藤沢一夫氏と奈良国立文化財研究所の方々から御教示を賜わった。

9 関係文献

泉佐野市教育委員会『泉佐野駅上地区試掘調査報告書』（一九八七年）

大阪府埋蔵文化財協会『上町遺跡発掘調査』（現地説明会資料22一九八九年）

同『上町遺跡（その3）発掘調査』（現地説明会資料25 一九九〇年）

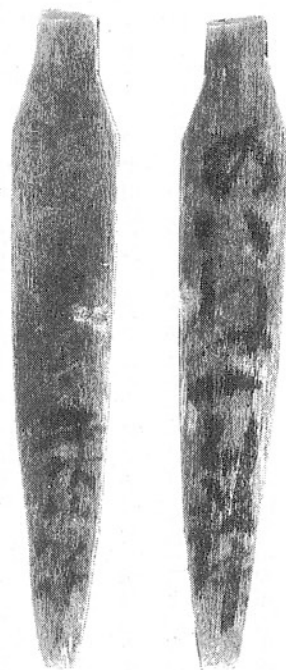
重金 誠「泉佐野市・上町遺跡発掘調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第20回）資料』一九八九年

同「上町遺跡（その2）」（第27回埋蔵文化財研究集会資料『中世末から近世のまち・むらと都市』一九九〇年）

『古事類苑』植物部二二



羽子板状木製品実測図



木簡写真

(追記)

成稿後、東京大学の石井進氏から本木簡の記載内容について御教示を賜った。釈文そのものの解釈にも関わるため、その要点を略述する。

一、野稻(のいね)の用例は「入来文書」中にあり、鎌倉期まで遡らせることが可能であろう。

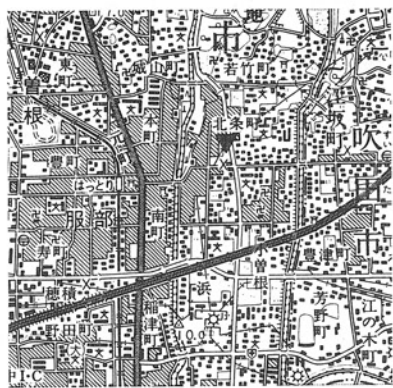
二、「加せ□」は「加せう」と判読できる可能性が高い。このうち「加せう」について、筆者個人としては調査地の南西約3kmの泉南郡田尻町内に「嘉祥寺(かしょうじ)」の地名が現在も残っており、「かせうじ」を略記したのではないかと考えている。

(重金 誠)

大阪・小曾根遺跡

- 1 所在地 大阪府豊中市北条町一丁目
- 2 調査期間 一九八九年(平一)一月～六月
- 3 発掘機関 豊中市教育委員会
- 4 調査担当者 森 幸三
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

小曾根遺跡は豊中市の南部の天竺川・高川に挟まれた標高約4m前後の低地平野部に位置する。弥生時代から室町時代にかけての複



(大阪西北部)

合遺跡であり、また文治五年(一一八九)の「春日社領垂水西御牧榎坂郷田畠取帳」に当時の様子が記されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴い実施された小曾根遺跡第一五次調査で、弥生時代中期の竪穴式住居・壺